モンスター達の人理修復

蹴翠 雛兎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――――狩人と怪物がいる、とある世界にはこんな知られざる話がある。

吹雪吹くとある日の雪山に厄災と言われし竜二匹、神と言われし竜一匹、とある村を襲いし時、その村に棲みし三匹の異質なる竜達が、救われた恩を返す為、人を守るため、襲いに来し竜達を狩りにいき、村を救い、死した。

その姿、そのまるで人の英雄のようだった、と――――――。

この物語は英雄となったその三匹の竜、彼女達の人理修復の物語である――――。

目次

プロローグ ―――――――― 1
序章／カルデアに現れし黒蝕竜
第一話／召喚 ―――――――― 4
第二話／ノワール ―――――――― 10
第三話／黒蝕の竜姫《前》 ――― 16
第四話／黒蝕の竜姫《後》 ――― 23
第五話／自身の存在とその意味
29
第零章　特異点f　炎上都市冬木
第六話／炎上する世界《前》 ― 37
第七話／炎上する世界《中》 ― 45
第八話／炎上する世界《後》 ― 53
第十話／解き放たれし竜の力 ― 59
第十一話／竜姫の目覚め（リメイク）
――――――――― 63
第十二話／燃える町（前編） ― 72
第十三話／燃える町（後編） ― 77
第十四話／霊脈地へ① ――― 81

プロローグ

――とある雪山にて――――――――。

――心から守りたいと思った。

『――そこのものらよ、我らの前からどくがよい！』

――命懸けでも、村を、皆を、あの二人を守りたいと。

『――いやだな！この先には、あたし達の故郷があるんだぜ!?なのに、どけるかってのの!!』

『――同意です。私のお世話になった方々がいる村があるのに、その方々が未だ避難もできていないのに、あなた達を通すわけには行きません！』

――だから、さっき、私達はあの二人を、～～～と～～～を谷に突き落とした。

『――死んでも良いのですか?』

――正直、谷にあの二人を突き落としたことは、後悔しているし、きっと、あの二人は私達のことを恨んでいるだろう。怒っているだろう。

『――はっ、もとよりこの私達の命、あいつらに助けられていなかったたら、なかったも同然だったんだぜ?』

――でも、私はそれでもいいと思っている。
『『――ならば、後悔しながら死ぬがいい！』わ！』
『――いやですね！そうでしょう？ノワール』
――だって、私はあの二人にこの身を救われた身であり、元々、混沌と災禍を運ぶ黒き衣の竜、【〈――〉――・――】なのだから。
『――ええ！・・・二人とも、あいつら（モンスター三匹）を倒（狩る）すわよ！』
『――わかった！』『――了解です!!』
さぁ、狩ろう。みんなを守る為に――――！

――狩人と怪物がいるとある世界にはこんな知られざる話がある。
とある旅人曰く。
旅の途中、とある村に住む、不思議なモンスターを三匹見た。
通常より小さく生まれてしまった竜と、通常種と亜種の間に生まれた竜と、特異な能力を手に入れたとある竜の雌の三匹だ。
聞けば、その三匹は特殊な生まれ方をしたらしく、死にかけたりしていた所をとある二人のハンターに救われたらしい。その為、その恩を返すために、そな二人のハンター

達を、そのハンター達が住む村を、モンスター達から守っているらしいのことだ、と――――。

とある詩人曰く。

吹雪吹くとある日の雪山に厄災をと言われし竜二匹、神と言われし竜一匹、とある村を襲いし時、その村に棲みし三匹の異質なる竜達が、救われた恩を返す為、人を守るため、襲いに来し竜達を狩りにいき、村を救い、死した。

その姿、そのまるで人の英雄のようだった、と――――。

この物語は英雄となったその三匹の竜――――彼らの、いや、彼女らの、一つの人理修復の物語である――――。

序章／カルデアに現れし黒蝕竜

第一話／召喚

――どこからか、呼ぶ声が聞こえる。

――ライガだろうか？シラハだろうか？村のみんなだろうか？それとも――

――？

――誰かはわからない。誰が読んでいるかは。

――でも、どちらにせよ、誰にせよ、私を呼んでいる。

――必要とされて、呼んでいる――――。

――

――

「――――えっと・・・どうしても、召喚・・・しなきゃダメ・・・？」

俺がそういうと目の前の一同がうんうんと頷く。
うん、どうしてこうなった。

――――思い返すこと数十分前、双子の妹、立花（りっか）のとある発言から始まった。
「――――ねぇ、立夏にぃ。今、思ったんだけどさぁ。英霊召喚で、アニメやゲームのキャラとかを召喚って、できないかな？」
「んっ？どうして？」
「いやだって、噂でなんだけどさ、とある魔術師が英霊召喚したら、某幻想の巫女のキャスターが現れたらしんだよね。それで、私達もできるかなあ・・・って思ってね。まぁ、噂ではすぐに謎のスキマから美女が出でくると、その子、いなくなっちゃったらしいし、何より、噂、ってところなんだけど・・・」
「でも、試したいということか？」
「うん」
「けどなぁ・・・あくまで噂だろ？そんなことg「えっ？できるよ？」えっ？ド、ドクター!?今なんと!?というか、いつからそこにいたんですか!?」
「ついさっきだよ。にしても、アニメやゲームのキャラを英霊召喚でよびだすかぁ・・・。理論上ではできなくもないよ？できなくもないんだけど・・・ただ・・・・」

「「ただ？」」
「色々と手間や時間がかかるし、その上、運も良くないといけないし、それに、召喚できたとしても、自分が狙いたい子じゃない可能性もあるし、色々な原因ですぐに消えてしまう可能性があるから、現実的に言えば難しいんだよね・・・・」
「あれ？ドクター？その言い方だと、自分もしたこともあるように私達には聞こえるんだけど・・・」
「うん・・・僕も前にその噂を聞いてね。それで、初音○クやブラッ○☆ロッ○シューター、マギ☆マリとかを召喚したくて挑戦してみたんだよ・・・・」
「「それで結果は・・・？」」
「ハハ、見事ニ失敗デスヨ。ハハハ・・・」
「「」」↑ドクターにあまりにも悲しそうな、悟った顔で言われたため、何も言えない二人。
「――――あら、二人共、こんなところでどうしたの？・・・それと、なんであなた達の後ろでロマニが何か悟ったような顔をしてるけど・・・・」
「あ、オルガマリー所長。実はかくかくのしかじかで・・・」
「なるほど、そういことね・・・」
「はい」
「はぁ・・・それで、あなた達は召喚するつもりなの？私としてはして欲しいのだけど・・・」

「はい、召喚しようと思ってますが・・・でも、なんでそれを・・・？」
「い、いえ、別に気になっただけよ」
「そうですか・・・さてと、とりあえず立夏にい、召喚するためにもロマンを元に戻そうよ」
「だね。俺も噂が気になるし、やるか」
「私も手伝うわ」
――――思えば、この時、召喚を手伝ってしまったのがダメだった。
この後、ダ・ウィンチさんやマシュとかが自分も見たいと言って手伝いに入ってきて召喚の準備がはかどったんだけど、まさか、召喚する時になって妹が「あ、私は召喚しないからね？」っていうとは思ってなかった。しかも、その後に反論したら「別に、召喚しようとは思っているって言ったけど、私がするって言ってないじゃん。それに、私はてっきり、立夏にぃが召喚するんだって思っていたんだけど・・・？」って言ってきたし、みんなもそれに同意してきたし。みんなに嵌められたと思った時にはもうすでに時遅し。結果、俺が召喚する羽目になって、現在に至る。
（・・・にしても、俺が召喚しなきゃいけないなんて・・・。はぁ・・・仕方ない、とりあえず、唱えるか・・）
「素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。　四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ
閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する
――――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ
誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。
汝三大の言霊を纏う七天、
抑止より来たれ、天秤の守り手よ――――！」
よし、召喚陣が光った！
これで――――！
「ちょっと、待ってくれ！この反応は・・・!?」
「ど、どうしたんですか!?」

「計測値がおかしいんだ！これじゃあ、まるで――――!!」
「くるわよ！」
所長がそう言うとともに、召喚陣から三つ、光輪が浮かび上がり、黒い霧を出して回転しながら収縮し、最後に、まばゆい光を放った。
――――そう、まるで・・・まるで、これからくる者を指し示すかのように。
そして、気がついた時には。
「っ！・・・私の後ろにきなさい！」
『ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ』
黒い竜がそこにいた――――――――。

第二話／ノワール

――暗い。
――途轍もなく暗い。
――そして、ひとり。
――ひとりぼっちだった。
――生まれた時から、体が小さく、その上、その時は病弱気味だった私にとって、悲しい事に、それが全てだった。
――でも、ある日、私がとあるモンスターとの戦闘で怪我をした時だった。
――私の目の前にあの二人が現れたのは。
――私に対して、あの二人は――――――――。

――――――――

「――――――――んっ・・・んん・・・・」
あれ？ここは一体・・・・？
確か、私はあの二人と一緒にいたはずなんだけど・・・。

「一体、どうなっているの・・・って、あれ?」
今、私、人間の女性の声で・・・しかも、人間の言葉で喋った・・・?
それに気のせいかな?私の目線がいつもより低く感じるのだけれど・・・?
一体、どういうこと?まさかとは思うけど・・・。
私、人間になっていたり・・・・する?
ははは、まさかそんなことあるわけ――――――――――。

あった・・・・。
この部屋にあった大きな鏡を見たら、人間の女性の姿――――白く簡素な服を着た、黒い髪に、紅く深い眼がついたどこか素っ気ない顔の美少女だった。
にしても・・・やっぱり、人間になっても・・・・。
「・・・・・低、身、長、なのね・・・」
そう呟き、落ち込む私。
わかっていた。そんな気がしていたから。
でも、これは・・・うん・・・・・落ち込むわ・・・・・・。
――――生まれた時から、近視であるとはいえ、通常の個体とは違い、目が見え、そして、その代償なのか、通常個体より小さかった私。それは、成長しても同じことで、最

大まで大きくなっても全長は約１３２９．２センチメートルと、通常個体と比べると一回り小さかった。

正直、転生したりなんやらしたら、どうか通常より身長の大きい人（？）になりたいと思っていたけれど・・・。

と、そんなことを考えていた時だった。

「――――あ、目覚めましたか？」

突然、そんな声が聞こえ、私はすぐさま、後ろへジャンプし、警戒する。

それと同時に、翼脚が突如として現れたが、今は無視をすることにする。

今はそんなことよりも、だ。

「貴方は誰？」

「あ、え、私ですか？私はマシュ――――」

「敵？味方？どっちなの？敵だったら、私の目の前から去りなさい、さもないと殺すわよ？」

この女性が敵か味方かを判断しないといけない。

さらに言えば、何故、私の姿が人間になっているかも聞き出されれば、尚よしである。

「あ、ああ安心してください！み、味方です！」

「じゃあ、証拠は？何か、味方って証明できるものは？」

「え？えぇ～と――――」
「別になんでもいいわよ？焼いた肉でもいいし、そこに隠れてこちらを見てる人をボコって連れてきてもいいし、身分を証明できるものでもいいわ」
「ちょっと待ってください!!最後の身分の証明はいいとしても、なんで、焼いた肉を持ってくることで、味方という証明になるんですかっ!?しかも、所長は心配してこちらを見てきてるのに、何故!?」
「えっ？なんとなく殴りたいなと思ったから。あと、お肉関してはお腹減って食べてかったから」
「そんな理由でですか!?」
「えっ、なんとなくという理由で、マシュに私を殴らせようとしたわけ!?え、そんな理由で!?」
何故だろう。
この人達、弄りがいがある気がする。
そう思ったのは、私だけだろうか？
まぁ、それは置いといて。
「それで、話を戻すけど、味方って、証明できるものはあるの？」
「えっ！あっ、えっと――――」

「はぁ・・・これでいいかしら?」
　白銀色の髪の女性の人がそう言うと、ポケットから銀色の懐中時計を出し、私に渡してくる。
「これは・・・?」
「無くなった父の形見。命より大切なものよ・・・」
「えっ!?しょ、所長!そんな物を渡してもいいんですか!?」
「ええ。どうせ、このままだったら、平行線のままじゃない。それなら、いっそのことね・・・。まぁ、これで信じてくれない「わかったわ。貴女達を信じてあげる」・・・えっ?今、なんて言ったの?」
「だから、信じるっていったのよ」
　――――嘘ついているように見えなかったしね。
　そんなことを思いながら、私は翼脚をできるだけ小さくたたみ、所長と呼ばれた白銀色の髪の女性の元へ行く。
「えっ、ちょっと、待ってくれるかしら!?えっ、えぇ!?ここは普通、疑うところじゃないの!?」
「たしかにそうですよね・・・でも、なんで・・・?」
「ふふ、生憎、私は人のことを信じやすいのよ。それに、嘘をついていない事も分かって

いたしね」

――――実は、この部屋には狂竜化鱗粉（ウイルス）に似た極々微量の、生物の体内に入ると微熱を発する特殊な鱗粉を撒いてあり、それを使って嘘をついているかどうかを調べたのだ。

人より信じやすく、それ故に、騙されやすいことも自覚してるゆえの行動だった。

「――――それで、貴女達の名前は？」

「えっと・・・マシュ・・・マシュ・キリエライトです」

「オルガマリー・アニムスフィアよ。貴女の名前は・・・？」

「私？私はノワール。ノワール・ゴア・マガラよ」

――――そして、今、ここに、黒蝕竜姫が人理修復の旅に参加することが決定した――――。

第三話／黒蝕の竜姫《前》

「――――というわけなのよ」
「なるほどねぇ・・・」
私は今、二人――――マシュ・キリエライトさんとオルガマリー・アニムスフィアさんに連れられながら、この場所――――カルデアのこととか、自分がなぜ、先程の医務室？にいたかを聞いていた。
――――本当に、どうしてこうなったのだろうか・・・？
そんなことを考える私。
聞けば、英霊と呼ばれる存在を呼ぶ為に、召喚したら、いきなり、黒い竜が出てきて、かと、思えば、風に飛ばされる砂のように消え去り、中から、私が出てきたと言うではないか。
しかし、そうなると、おかしな点がいくつもある。
今、大きく取り上げるとして、三つ。
一つ、私は、元は、人でも、神でも、ましてや、人の姿をしていた訳でもない、正真正銘の竜なのだ。なのに、私は人間になっている。

二つ、通常、英霊と呼ばれる存在が呼ばれる召喚に私が召喚されている。
三つ、二人は私の竜の時の種族の名前である黒蝕竜『ゴア・マガラ』や、あの世界で最も有名である二匹、雌火竜『リオレイア』や火竜『リオレウス』などといったモンスターの名前を知らない。
一つ目に関しては、二人に聞いても原因不明だし、私もわからない為、保留。
二つ目、まあ、これに関しては、少しだけ思い当たる節が二つある。
三つ目、これが問題である。
もう一度言うが、二人はあの二匹の火竜などのモンスターの名前を知らないという。
それは、おかしい。
なぜなら、あの二匹は、知らない人が逆に少ないと言われるほど、有名なのだ。
なのに、この二人は、知らない。
――どういうことかしら？
そんな思いが膨れ上がる。
しかし、同時に、答えも自分の中で出ていた。
それは――
私は、私のいる世界とは違う別の世界に召喚されたのではないか？
――という答えである。

そうなると、二人がモンスター達を知らないことに辻褄があう。
――冗談がきついわね・・・。
私は前を歩く二人に、バレない程度に苦笑し、自分の出した答えに呆れ、納得する。
確かに、私はたまに、ここと違う世界があるなら、行ってみたいなぁ・・とは思っていた。
しかし、それは、あくまで、願わないことを知ってのことである。
だが、今回、それが実現されてしまった。
――なんというか・・・嬉しいとでも言えばいいのか・・・皮肉とでも言えばいいのか・・・・・。
そんな、なんとも、なんとも言えないような、複雑な感情になる。
正直、気心知れた、あの私の姉貴分でもあるあの狼竜ならば、こんな風に考えないだろうし、あの狐竜もとっくに切り替えてただろう。
しかし、残念な事に、私はその二人　二匹ではないし、その二匹の性格に似てもいないのだ。
それは無理な話という事だろう。
私は私。
それはおそらくこれから変わる事のない話だ。

・・・なんというか、悲しい話でもあるけど。

――――そう言えば、さっきから、このカルデアの施設を二人に紹介されながら、連れられていたけど・・・。

「・・・ねぇ、オルガマリーさん、マシュさん。私、先程からなんも聞かずについてきたけど、今、何処に向かっているの？」

「・・・あれ？ノワール、私、言ってなかったっけ？」

「言ってませんね・・・」

「えっ・・・マシュ、嘘よね・・・？」

「所長、本当です」

マシュさんと私にそう言われ、しまったというような顔をするオルガマリーさん。

・・・うん、どうやら、弄りがいがある気がしたのは、気のせいじゃなかったらしい。

「・・・えっと・・・・とりあえず・・・なんというか・・・ごめんなさい」

「えーと・・・大丈夫ですよ・・・？」

「なんで、ノワール、敬語＋疑問形になってるの・・・!?」

「キノセイデスヨー」

「ノワールさん、まったく説得力がないです・・・」

「と、そうこうしているうちに、と――――」

そう言って、オルガマリーさんがとある扉の前に立つ。
「ロマニ、いる？あの子を連れてきたわよ」
「――――うん、わかったよ。入って」
「わかった。んじゃ、失礼するわ」
「失礼します」
「失礼されますよ」
「ノワールさん・・・貴女は、失礼する側でしょ・・・？」
ナンカ、オルガマリーサンガ、白イ目デ私ノ方ヲ見テイルケド、気ノセイダヨネ。
そんなことを思いながら、私は部屋の中に入る。
「それで・・・後ろにいるのが・・・」
「ええ、先程、黒い竜から出てきた子よ」
「そうか、さっきは人が竜の中から出てきたってことで、あまりにも慌ててたから、顔を見ることを忘れていたけど、君がね・・・。初めまして、ボクはここ、カルデアの医療部門のトップ、ロマニ・アーキマン。何故か、みんなからＤｒ．ロマンと略されていてね。君も遠慮なくロマンと呼んでくれても　いいとも。そして、僕の隣にいる二人が・・・」
「私はダヴィンチちゃんだ。よろしくな」

「初めまして、藤丸立夏です。よろしく」
「・・・そう。私の名前はノワール。ノワール・ゴア・マガラよ」
「んっ・・・・・？（・・・ゴア・マガラ？）」
「どうしたんだい、立夏君？」
「いや、ちょっと、さっきの名前が引っかかったので・・・まぁ、気にしないでください」
「君がそう言うならわかった・・・それで、僕の後ろに・・・って、あれ？君の妹さんは？」
「先程、『トイレと運動しに行ってくる～！』とかふざけたことを言って、どっかに行きました・・・」
「相変わらず、立花先輩は・・・フリーダムですね・・・」
・・・・気のせいかな？
私、空気になりかけてるような・・・？
「・・・ちょっと、あの妹（バカ）を連れ戻してきます」
「行ってらっしゃい・・・程々にね・・・？」
「それで、ノワールさん。君にちょっと聞きたいことがあるんだけど・・・」
「何ですか・・・？」
「君、ここに来るまでの記憶はある？」

「・・・えっと・・・暗闇の中で何かに呼ばれるような声がしたのは、うっすら覚えているのだけれど・・・そこからは・・・」
「やっぱり・・・」
「何が、やっぱり、なの？」
「実は――――」
Ｄｒ．から放たれた言葉は、私たちを驚かすものだった。

第四話／黒蝕の竜姫《後》

「――――何が、やっぱり、なの？」
「実は・・・さっきまで、ノワールさんのことというか、身体を調べてたら・・・なんというのかな、不定形というか、純粋な英霊じゃなっかたんだ」
「ドクター、ちょっと待ってください！それはどういう意味ですか!?」
「ごめん、説明が足りなかったね。・・・そうだね。もう少し、うまい表現すると、ノワールさんの存在が人間でも英霊でもない、虚ろな感じなんだよ」
「・・・ふぅん・・・なるほどね。つまり、私は実体はあるけど、ただの幽霊みたいなもんと考えてもいいわけかしら？」
「そうだね。そう言っても差し支えはないね。実際、ノワール君のことを調べてた時にこんなものがでてきたんだ」
――――
クラス：々２〒／，▪＊×？＊〒―??
真名：ノワール・＊＊ゴ@＊〔$？＝％ガ・＊、ラ
性別：女性

身長・体重：１５２ｃｍ・５３Ｋｇ

出典：モ？×９，・ハ〇〆ター

地域：５＄％＜１：÷，］０

属＝＞／：混沌、善

ステータス

筋力：Ａ＋

魔力：Ｅ

耐久：Ａ

幸＋＞＜：Ｂ

俊敏：Ａ―

宝具：ＥＸ

プロフィール

固―＾／スキル：

＋×￥＋・：ＥＸ

まだ、―ｂＢゑだった時、つ＼⊥△▼？△〕ｂＢゑ≒ゑ▪ｂ、自分の守りたいもののために？、”〔５＝▪（，―＆」▪＊―？〔〕＞、＜―，「?!｝＆。？＝・＊@＾―」）＞▪▪（，▪

「｜｛＼＼＠｛＊｜＋？＝｜｜｛＊｜＝＼．　％？？＼，？＝．＿｜．「｛｛＝｛＿｜＝、｜　｜
｛　〝ＯＰＩＰΨ＃％∬、スキルとなったもの。」Ｏ％＼Ｏ｜〆［に特攻効果を持ち、］］．すことができる。
＿｜＠＆＊＃％〝！使い：Ａ＋
生前、＞％？＊？＞・％、・」　＄と認めた狩人二人からもらった＞％＆　％＞＆＿％を自在に操って戦っていた事がスキルとなった。
＞＞％＆　％＞＆＿％を装備している時、」；　，＞＼、％〝＃｜！＊　〝：？｛，と呼ばれる技術、全てを使う事ができる。
〝〝＾トルス＾＃＝｛〝〝」＝：Ｂ＋
＜「＠＆！＆｛〝！〝＜｛にいた狩人が生み出した狩猟方法を真似て戦ったことがスキルとなった。〝＜＾＜ル？｛｜＿〝？＠・ト「｛？＾，，・．｜｜＠リ＾＿＼＼・ブレ？＠｜｛｛＝｜　の４つのス＾＿　，｛，！ルを選び、使う事ができる
＠｜｛＄｛＝｜＃：ＥＸ
生前の＄＜ある状態の名称がスキルと＊＋［］たもの。
自身のク＜［スを▪｜＾＿＼＼・にし、＝｛〝＾＿〝」＝＾＿の二つの効果を付属、：
＠ｐ／」ｐ＠，／・｛｛力を二倍にする。
狂竜＋５€〒６＋：Ａ＋

龍の姿だった時、使っていた＋８７～・＜$〒＊９＜▪▪々?％。）」@▪!♪（×〒ｄｌ÷。スキル。

味方全員の?☒＊☒〕力を上げたり、相５＋／の能―／≪＊％５を下げることができる。

なお、ノワール自身の手に?＜って色々と応用さ≪．―ているため、相手≪――?嘘を見抜いた?＋、「＊２＜を固め、即席の武器―、５する事もできる。

@；．［@．＊｛?］?＿｝付与＆＿＊｛＊｝〔”＃＊＆Ｕ＋＆＊＋!無効化：Ａ

狩人の手によって育］／@］；．２!れた結果が、スキルとなったもの。

自身の攻撃に@；．［@．の属性が付与される。

また、＞｝＊＞?｝＿＊?｛?］??：］＊｝２＃”!３?攻撃を無効化してしまう。さらに、＊｝クラスを＊?］／］］：［＿＊｝＿／”＃!”$!に限定する能力を持つ。

＿｝＊＿の@、＃圧：ＥＸ

咆哮すると?］／／：．：／!”＃３２＃＃!４が怯んだように見えたという、と＊＋｛＋る狩人の話がスキルとなったもの。

相手が％＋％＊＃” ＋＆” ＆＊’ １；＃$６６：；］：；６；@１［４、一時的に行動不可能にする。

?Ｐ?、?Ｐ：ＥＸ

自身／＊、Ｐ身体を＿＊：させ、？Ｐ、＃!”.＃!”.させるスキル。

＿＊；する時、その姿は、天使のよ：］ｐ@］：見えると言われている・・・。

宝具：

『［：］@｛＃!”.＃：］］』ランク：?］｛明

レンジ：１～１０　種別：不＾％

生前の自身の全てが凝縮し、魂となり、宝具となったもの。$～$｛%｝＾＾｝$～$＋｛€｜＾｝＾｝$$＜器とありとあらゆるものを＾＃$｝＾＾｝、＊｝＊　ｉｒｉｄｉｒｕｒｕを放つことができる＾｝$｝$｝＾］＋＝、そして｝＊€｝＊＊｝€＜$｝＊€｝$$スの＾｝７▪６６５。

宝具と化したその魂は、＞（＞）５＜（６＊，，））$｜｛＞€＾といわれている・・・。

『ウィａ｝＜｜ｏｆ／＃＃／』ランク：＆▪＞＞｝

レンジ：　１～２　種別：｝＾$｝＾＞€～～＊＊

スラ｝＾$｝～～＾～$€と呼ばれる武器が宝具と＾｝$｝$たもの。

＾｜$％＾｜$一閃は、％｛＞｛％｛＾　｛＞＞｛＞＾と言われている禍々しい剣斧であり、素材の元となっているノワー～$$自身が使うことでさらに$｝$｝＊＊｝$｝＾６４（！｜いる。

ーーーー

「何・・・これ・・・ステータスが・・・」
「所々、文字化け・・・してますね・・・」
そう言って、呆ける二人。
おそらく、単純にステータスが文字化けしてるのと一部から読み取れる情報に驚いているのだろう。
私に関しては、文字化けしたこのステータスから、おそらくあれかな?という予想をしていた。
「・・・普通、英霊ならありえないことなんだ。こんな風に文字化けするなんてことは」
「なるほどね・・・だから、私は純粋な英霊じゃないってことをね」
「そういうこと。だからこそ、僕は君に聞きたいんだ。君は何者なのかってことを」
そう言うと、ロマニさんとダヴィンチさんは真面目な顔になる。
おそらく、私という存在を見極めようとしているのだろう。
なら、私はこう答えようか。
「先程も言いましたけど、私の名前はノワール・ゴア・マガラ。そして、それ以下でも、それ以上の存在でもない元モンスターであり、人に飼われていたドラゴンであり、ただの竜から人間になった者よ――――」

第五話／自身の存在とその意味

「――――先程も言いましたけれど、私の名前はノワール・ゴア・マガラ。そして、それ以下でも、それ以上の存在でもない元モンスターであり、人に飼われていたドラゴンであり、ただの竜から人間になった者よ」

私はそうきっぱり言った。

元よりこの命、あの二人に拾われ、救われた命、もしかしたら存在していなかった命なのだ。

恐らく、あの狼竜もそうだし、狐竜のあの子もそうだろう。

ならば、私と言う存在を答えるならば、一番この答えが適しているだろう。

私は私であり、それ以上でもそれ以下でもない存在。

それはこれからも変わる事のないことであり、そして、私達にとって大切なこと。

恐らく、他の二匹も私と似た答え方をするだろう。

だからこその答えであり、そして同時に私自身の存在への意味だと思っている。

「そう・・・それが君の答えなんだね？」

「ええ。それが私の答えであり、そして、私と言う存在だから。人を守りたいと思う、普

通の存在だから」
「そうか・・・ふふ、わかった。君をカルデアの一員として認めよう。マリー達もそれでいいよね？」
「えぇ、いいわ。元よりそのつもりだったしね」
「同じく」
「私もです！」
　そう言って、ロマニさんの言葉に頷き、同意するマリーさん達。
「ありがとう。これからよろしくお願いするわね」
「はい！」
「えぇ、こちらこそ」
「楽しくなりそうだ！」
「僕の方こそよろしくお願いするよ。さてと、みんなお茶でもするかい？」
「あっ！いいですね！」
「じゃあ、私は――――」
　と、和やかになっていたその時だった。
「――――待ちやがれ！このバカ妹！」
「やだよ！誰が待ちやがれ！って言われて待つバカがいるの!?」

「目の前にいるじゃねえか！バカなら！」
「はぁ？この私がバカ？ありえないわ～！私は天才だもんね！」
「この前、なんかのテストで０点を取っててか!?はっ、笑わす!!」
「ふっ、お兄ちゃん！あれは寝てただけだ!!」
「人はそれをバカと言うんだよ！待ちやがれ！」
そう言って、突如として部屋の中に入り、立夏さんと女の子がバタバタし始めた。
それと同時に・・・。
同時に・・・何故か、後ろから、プチっと何かが切れたような音が聞こえた気がした。
「――――二人共、止まりなさい・・・!!じゃないと・・・貴方達だけ出す課題を増やすわよ・・・!?」
「は、はいぃ！所長！す、すみませんでしたぁぁ!!」
「所長、すみません・・・！」
マリーさんが静かにそう言うと、二人はその場に止まり、直立した。
うん、マリーさん、地味にすごい・・・。
・・・にしても、さっき、二人がバタバタしてた時、一瞬、まさにバカの代名詞のような感じの少年と、天童みたいな感じがした少年が見えた気がしたのは気のせい？
「はぁ・・・次、雰囲気ぶち壊すようなことをしたら、今度こそ、講義の課題を貴方達だ

け倍出してもらいから・・・いいわね・・・？」
「はい！所長、すみませんでした！」
「すみませんでした・・・」
「はぁ・・・それじゃあ、私はレイシフトの準備にちょっと行くから・・・」
「それなら、僕も行くよ」
「ロマニ、貴方は来なくていいわ。現場の空気が崩れるから」
「あ、じゃあ、代わりに、私も手伝います！」
「マシュ、ありがとうね。それじゃあ、私達は・・・」
「ええ、色々とありがとうね。二人共」
「いえ・・・私達はただ、ノワールさんが現れて、すぐさま倒れたから、介抱したですから」
「それでも・・・ね。嬉しいのは嬉しいし、それに、色々と分からなかったことが多かったし、その分、不安でいっぱいだった所があったから、案内している時、私のことを途中途中で心配してくれたり、色々話してくれた二人には、感謝しかないのよ。本当にありがとうね。この借りは必ず、精神的に返すわ」
　私はそう言って、軽くにこりと笑う。
　二人を見ると、マシュさんは嬉しいそうににこりと照れて、マリーさんは、顔を明後

日の方に向けながら、少し恥ずかしそうに、頬をぽりぽり、掻いていた。
「いえ、どういたしまして！」
「べ、別に、ただ、私は気になっただけだからね・・・！」
「ふふっ・・・♪それじゃあ、マリーさん・・・」
「えぇ、また後で・・・」
「マシュさんもまた後でね♪」
「はいっ！ノワールさん、また後で会いましょう！」
　そう言って、二人は部屋から出ていく。
「・・・さて、と。どうしようかな？レイシフトの準備をしようにも、マリーには来なくていいと言われちゃったし・・・」
「そういえば、ロマニさん。今更だけど、そこの女の子は・・・？」
「あぁ、そういえば、ノワールさんが来た時に、立花ちゃん、居なかったから知らないのも同然か・・・。立花ちゃん、ごめんだけど・・・」
「あっ、はい！わかりました！初めまして！立夏の双子の妹の、藤丸立花です！好きなものはゲームやアニメとか！よろしくね！」
　そう言って、にっこり笑う立花。
　なんというか、お辞儀する立夏と対照的だった。

「立花ね。私はノワールよ。よろしくね」
「うん！よろしく！」
「・・・それにしても、立花ちゃん。ちょっと、気になったんだけど、その手にある３○Ｓは一体何かな・・・？」
「あぁ、これ？いやぁ、ちょっと、皆んなで遊ぼうかなぁって思ってついさっき、持ってきたの」
「このバカ・・・いつの間に・・・・・」
「そうだ！ノワールさんもやる!?」
「そうね・・・私はいいわ」
「そうですか。それじゃあドクターは？」
「やらせてもらうよ。んじゃ、僕のを持ってくるから待ってて」
「それじゃあ、私はその間、ポケ○ンでもしようかな？」
「ほう、立花もしてるのか」
「えっ？ダウィンチちゃんもですか!?」
「そうだ。私もやってる」
「へぇー！私の所は、超火力のバ○ャーモをエースなんですけど、ダウィンチちゃんは？」

「私の方は、ル○リオをエースにしてるんだ――――」
何か、ダウィンチちゃんと立花がゲームの話で盛り上がってるわね・・・。
それじゃあ、私は・・・。
「立夏さん、ここに本とかあるかしら?」
「えっ?どうしてですか?」
「別に普通に喋っていいわよ」
「それじゃあ、お言葉に甘えて・・・んで、どうしてなんだ?」
「なんとなく読みたい、ってのもあるのだけれど、それ以前に、ここの知識をもうちょっと・・・ね・・・」
「あぁ、なるほどね・・・。わかった。それじゃあ、ノワールさん。持ってくるから待ってて」
「分かったわ――――」
そうして、こうして、私達は各々の時間を過ごしていた――――。
ーー同刻、某所にてーーーー
「――――さてと、これでいいかな?」
男は不敵に笑い、目の前の爆弾を見る。
「ハハハハハッ!これでほぼ全ての準備は終わった!もうすぐ始まるっ!人理滅却がも

うすぐ――――!!」

第零章　特異点f　炎上都市冬木
第六話／炎上する世界《前》

「――――これで最後・・・ね」

そう言って、私は本を閉じる。

あれから、数時間、色々な本を読んだ。

このカルデアの事が書かれたもの、この世界のこれまでの歴史が書かれたもの、少年少女が見るような教育書、幼い子に聞かせるような絵本、様々な種類の本を読んだ。

そうして、気がついた時には、私は五十冊余りの本を全て、一時間で読み終わっていた。

おそらく、元々、竜の頃から本を読んだり、読み聞かせしてもらったりするのが好きな上に、理解して読むスピードもかなり早いからだろう。だから、こんなにも、読むスピードが速いのだろう、と最初はそう思っていた。

しかし、次第に本を読む内に私はある事に気がついた。

それは――――。

（――――まさか、私・・・人間になったせいか、竜の時より視界が広がった上に自分の

能力全てが上がっている・・・？）

それは、驚く事に自分の全能力が竜の頃より上がっていたのだ。

試しに、竜化して翼脚でロマ二さんに持ってきてもらった英霊用の握力測定器で測って見たら、昔よりどう考えても上がっていた（１９０キロは普通に出てた）から、確実に、おそらく英霊（？）になったお陰で能力が上がったのだろう。

まぁ、同時に、おそらく原因はそれだけじゃない、という気も私はしてるが・・・。

しかし、この際、私だったらどうでもいい事。

あの狼竜みたいに、単純にただの体当たりで、自分の数倍はありそうな奴ら、（例・雪山の奥にいるスコップさん、砂漠から時折出てくる体がお宝のロリコンエロジジイども）をよろけさせるどころか、横へと転ばせてる程の力なんて竜の時からないのだから。

・・・まぁ、そうとはいえ、もし私みたいにあの人（？）が人間になり、カルデアに来たら、下手すれば、今頃、ここは大惨事になっていると思うけど・・・・。

と、まぁ、そんなことは置いとくとして。

今は、読み終わったこの本をどうするか・・・ね。

片付けようにも、どこに片付ければいいのか、わからないし・・・。

とりあえず、ロマ二さんに――――。

あっ、ダメだ。

ロマ二さん、なんか、ニコッニコッニー!と言っている女の子のゲームをして、完全にマイワールドに入り込んでる。
となると、立夏・・・もダメだわ。
今、なんか、白を基調に、赤く発光するラインが入った、ロボットをすごい集中力で作ってる・・・。これは邪魔出来ない・・・・。
となると、残る二人に・・・は、頼まない方が良さそうね・・・・。
なんか、完全に、ロマ二さんに勝つためのポ〇モン議論とかいうのひらいて二人だけの世界に入り込んでるし・・・・。
うん、そうなると…ますます、どうしましょうか、この本・・・。
とりあえず、一回……。
と、その時だった。
《ピピピピッ!ピピピピッ!ピピピピッ!》
どこからか、謎の音が鳴り始めた。
「んっ?んー?お兄ちゃーん。この音って・・・」
「確かこれって、ドクターの回線機の音じゃなかったっけ?」
「そうだよね・・・ドクター!回線機が鳴ってるよ!」
「んっ?あ、本当だ。ありがとうね!」

そう言って、ロマニさんはなんかの機械を操作した。
「はい、ロマニ・アーキマンです」
『――――ロマニ、あと少しでレイシフト開始だ。すまないが、万が一に備えてこちらに来てくれないか？Ａチームの状態は万全だが、Ｂチーム以下、慣れていない者に若干の変調が見られる。これは不安からくるものだろうな。コフィンの中はコクピット同然だから』
「やぁレフ。それは気の毒だ。ちょっと麻酔をかけに行こうか」
『あぁ、急いでくれ。いま医務室だろ？そこから二分で到着できる筈だ。よろしく頼む』
そういうと、回線が切れたのか、《プー、プー、プー…》と部屋に鳴り響いた。

「「・・・ねぇ、ドクター」」
「・・・なにかな？藤丸兄妹」
「「ここ、医務室じゃないですよね？」」
「……あわわ……それは言わないでほしい……ここからどうあっても五分はかかるぞ……」
そう言って、その場で頭を抱えるロマニさん。
「・・・まぁ、ある意味、話自体は終わったのに、そのまま遊んでた人が悪いと思うけど

ね・・・」

「うっ…！ノワールさん、それ、言わないで…！」

「あら、事実を言っただけだけど？」

私がそう言うと、さらにｏｒｚの形になったロマ二さんなのでした。まる。

というか、その時に、

あっ、とどめ刺しちゃった…。

って言う声が聞こえたのは気のせいかしら？

「…ふふふ、ふはははは。もういいや。少しくらいの遅刻は許されるよね。Ａチームは問題ないようだし…」

そんなロマ二さんの呟きが部屋に響く。

…うん。

ロマ二さん、とどめ刺しちゃってごめんなさい。

そんなことを思いながら、ロマ二さんに心の中で謝る。

そういえば…。

「さっき話をしてた人は一体…」

「ああ、さっきの人は、レフ・ライノールと、言うんだ。疑似天体（カルデアス）っていうものを見るための望遠鏡――――近未来観測レンズ・シバを作った魔術師だ。シバはカルデアスの観

測だけじゃなく、この施設内のほぼ全域を監視し、写し出すモニターでもある。ちなみにレイシフトの中枢を担う召喚・換気システムを構築したのは、前所長。その理論を実現させるための疑似霊子演算機（ぎじりょうしえんざんき）……いわゆるスパコンだね、これを提供してくれたのがアトラス院。このように実に多くの才能が集結して、このレイシフトのミッションは行われるんだ」

「なるほどね…」

「まぁ…ボクみたいな平凡な医者が立ち会ってもしょうがないけど、お呼びとあらば行かないとね。落ち着いたら医務室に訪ねに来てくれ。美味しいケーキくらいはご馳走するから。それじゃ――――」

と、ロマニさんが行こうとしたその瞬間だった。

急に周りが暗闇に包まれたのだ。

この時、私は何か、嫌な予感がしていた。

言葉に出来ないような…不気味な予感がだ。

一体、何に対して、嫌な予感がしたのかは、わからない。

けど、こういう時、私、いや、私達は悪い予感がした時、野生の勘でも働くのか、良く当たるのだ。

実際、これまでもそうだった。

私があの二人に会う前、あの狼竜は、嫌な予感して、あの二人と共に散歩しに言ったら、村にあの風を操る鎧野郎が来ること気にがついたらしいし。

狐竜のあの子に関しては、もはや、予感自体が1／3の確率で当たる上に、悪い予感がした時には必ずと言ってもいい程、必中していたのだ。

だからこそ、私は暗闇の中、立夏達のいる場所を確認した。

何かあってはいけないから。

幸い、ゴア・マガラ本来の能力は健在らしく、暗闇でもこの部屋にいる全員の体温と居場所が分かった。

「にしても、一体何が――――」

その後の言葉を言おうとしたその時だった。

《ボガンッッッ!!!》

大きな爆発が聞こえ、すぐさまアラームが鳴り始める。

『緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、及び中央管制室で火災が発生しました』

――――一体、なぜ!?

私は、いきなりの火災に驚いた。

とは言えど、火災自体に驚いた訳じゃない。

火災が起こったことに驚いたのだ。

これは、マリーさん達から聞いた話なのだが、カルデアには火災そのものが起こりにくいように注意がされているらしい。
その為、例え、小規模の火災が起こっても、すぐさま鎮火して、被害を最小限にするようになっているらしいのだが…。
――――でも、この感じは…！
少しずつ、少しずつ、嫌な感じが強まっていく。
先程よりも深く、強く、不気味で、怖い感じが。
『中央区間の隔壁は９０秒後に閉鎖されます。職員は速やかに第二ゲートから退避してください。繰り返します。中央発電所、及び中央――――』
「今のは爆発音か!?一体、なにが起こっている……!?モニター、管制室を映してくれみんなは無事なのか!?」
ロマニさんがそう言うと、テレビの電源がつく。
そこに写っていたのは――――。
「…っ!?」
真っ赤に燃え上がる世界だった――――――――。

第七話／炎上する世界《中》

――――真っ赤に映る世界。
そこには、まさに"生"と言う存在を燃やそうとする炎の姿があった。
――――一体、誰がこんなことをしたのだろうか？
そんな怒りが沸々と燃え上がってくる。
しかし、それよりも心配な事があった。
それは――――。
「…管制室って、マシュは……!?」
――――マシュの事だった。
画面を見る限りでは、無事なのか、わからない状況だった。
オルガマリーさんの事もそうである。
二人共大丈夫なのか？
心配でしょうがなかった。
「これは――――」
ロマニさんはしばらくの間、呆然としていたが、すぐさま、首を振り、何かを振り払

うと、しっかりとした真剣な顔になる。
「藤丸　立夏、立花、ノワール。すぐに避難してくれ。ボクとダウィンチは管制室に行く。もうじき隔壁が閉鎖するからね。その前にキミ達だけでも外に出るんだ！」
「いいかい？お願いね！」
そう言ってロマニさん達は出て行く。
残された私達は画面を見続けてた。
「ねえ、ノワール、お兄ちゃん…」
「……」
立花が心配そうな顔で私達を見つめてくる。
分かってる。
今…私にできること。
それは、一つしかない。
そして、それは二人も同じ気持ちだったようだ。
「分かってる。マシュを助けに行こう！」
「ええ。私も手伝わせてもらうわ！行きましょう！」
「…っ！…うん！」
私達は急いで扉から出る。

「二人共、中央管制室への道は!?」
「確かこっちだったはずだ！」
　私は、急いで立夏達がさした場所へ向かった。
「次は――――」
「――――フォウフォウ！」
「あっ！フォウ君！」
「この子は…？」
「このカルデアを自由に散歩する特権生物。フォウだよ」
「でもなんでフォウ君がここに…!?」
「フォウフォーウ！」
「ついて来い、と言っているわね」
「えっ!?フォウの言葉がわかるのか!?」
「一応ね。これでも、人ならざる…っと、とりあえず急ぐわよ！」
「うん！」「分かってる！」
　フォウ君を追いかけて、私達は走る、走る、走った。
　そしているうちにロマニさんに追いついた。
「えっ!?立夏、立花、ノワール!?なんでキミ達が…！方向が逆だ、第二ゲートは向こうだ

よ!?」
「そんなこと、分かってますよ！」
「じゃあなんで!?まさか、ボク達に付いてくるつもりなのか!?そりゃあ人手があった方が助かるけど……ああもう…！」
ロマニさんは、そういうと髪をムシャムシャとかく。
「言い争っている時間が惜しい！隔壁が閉鎖する前に戻ってくるんだぞ！」
「「はい！」」「分かっているわ！」
私達はそう頷くと、ロマニさん達に共に管制室に向かう。
そうして、中央管制室に近づくにつれ、空気が暑くなっていく。
けれど、あの灼熱地獄と言っても同然の火山や砂漠を経験した私に取って、こんな暑さは些細なことだった。
それに、暑いからってこの歩みを止められる事なんてできない。
マシュやオルガマリーさんが怪我してまだ、管制室にいる可能があるのだ。
それなら、歩みを進めた方がいい。
一つ、意思を決めたら。
この心が、魂が止まるまで。
動き続ける。

それが私自身が決めていることだから。
「フォウフォーウ!!」
「着いたぞ！とりあえず扉を開ける！」
そういうと、ロマニさんが全力で扉に手を掛けるものの、開かなかった。
「ッ！ダメだ！押しても引いても開かない……！中から何かが……！」
「なら、私がするわ！扉は壊してもいいかしら!?」
「あぁ！大丈夫だ！」
「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらわね！」
私はそう言うと、力を溜めながら腕を竜化させて後ろに下がると、そこからダッシュして、そのまま、勢いで思い切り扉を殴り、開閉を邪魔していたであろう瓦礫と共にぶっ飛ばした。
「よし……！とりあえず、これで入れるわ……！」
そうして、燃え盛る炎の中、私達は管制室の中を歩きまわる。
「……見た感じ生存者はいない。無事なのはカルデアスだけだ。ここが爆発の基点だろう。これは事故じゃない。人為的な破壊工作だ」
そう言って、ロマニさんは管制室を見渡す。
『動力部の停止を確認。発電量が不足しています。予備電源への切り替えに異常があり

ます。職員は手動で切り替えてください。お願いします。障壁閉鎖まであと４０秒です。中央区間に残っている職員は至急速やかに――――』

「…ボク達は地下の発電所に行く。カルデアの火を止める訳にはいかない。ノワール、立夏、立花。キミ達は急いで来た道を戻るんだ。まだギリギリで間に合う。いいな、絶対寄り道はするんじゃないぞ！外に出て、外部からの救助を待つんだ！」

「ロマニ、行こう！」

　そういうと、二人は私たちから去っていった。

「……」

「お兄ちゃん…」

『システム、レイシフト最終段階に移行します。座標は西暦２００４年１月３０日、日本の冬木。ラプラスによる転移保護、成立。特異点への因子追加枠、確保。アンサモンプログラム、セット。マスターは最終調整に入ってください』

　どこからか、アナウンスが流れて来る。

「…二人共、ギリギリまで生存者を、マシュを探そう……！」

「わかったわ…！」

「うん…！」

　そうして、人を探そうとした時だった。

「…！マシュ…！」
「……、あ…」
私達が瓦礫に埋もれ、大量の血を流しているマシュを見つけたのは。
「……マシュ！しっかり…！今助けるから…！」
「……いい、です……助かりません、から。それより、早く、逃げな――――」
「逃げないわよ。私は絶対に…！」
「ノワール、さん…！なんで…！」
マシュさんが言い終わる前に、きっぱり言った私の言葉に、なぜ!?、と問いかける。
その気持ちはなんとなくわかる。
私も、私達も似たようなことをしたから。
でもね、マシュ、いえ、マシュ・キリエライト。
「私は、もう懲り懲りなのよ。家族が目の前で死ぬのは、あの一回だけで。もう懲り懲り…。だから、見捨てられないし、それに、見捨てる気もない」
「ノワール、さん……？」
「それに、私は元々、そんな冷たい柄じゃないし、元よりあなたとかを助ける為にここにいるの。だから、悪いけど、ここから逃げ出さない、何があったとしても、絶対に」
「…ノワールさん……」

「…マシュ、ノワールの言う通りだよ。私もお兄ちゃんも、同じ。助ける為にここにいる。だから…」
「お前を助けるまでは逃げ出さないからな」
そう言って、私達は宣言する。
この世界に、マシュが消える運命があるならば。
その運命をなんとしてでも、遠ざけ、無くし、消し飛ばしてやる。
少なくとも、私はそんな気持ちだった――――――。

第八話／炎上する世界《後》

「――――とりあえず、マシュの上にある瓦礫を退かさないとね…」

そんなことを呟きながら、私は周りを見渡す。

現在、私達は、この管制室の中の、燃え盛る炎の中にいる。

正直、私は目の前にいる三人が心配だった。

――――私達、モンスターや、それに乗る怪物乗り（モンスターライダー）、狩人（ハンター）、旅の途中、ナグリ村で出会った土竜族達とかならいざ知らず、目の前の三人はおそらく、こんな暑さの場所に来たことがないだろうからだ。

私が見るにこの管制室の中の温度はざっと１５０℃は、超えている。普通なら、皮膚が焼けてもおかしくない温度のはずだ。

それでもなんとか目の前の三人が大丈夫なのは、私が冷気を出し続けているから。

だから、私達がいるところだけ、温度が低い。

しかし、それでも、それをしても、まだ５０℃はある。

どうすれば…？

と、そこまで考えた時。

ふとあることを思い出した。
それは――――。
「――――そういえば、私…生前、あの中に…」
「どうしたんですか…？ノワール…さん…？」
「マシュ。私がここに現れた時、何かポーチとかってなかった？」
「ありました…けど…それがどうか…されたのでしょうか…？」
「今、それどこにあるか、わかるかしら…!?」
「確か…うっかり一緒に…持ってきて…しまって…向こうに…けほっけほっ…！」
「マシュさん！しっかりして！」
「ノワールさん…！」
「わかっているわ…！ごめんだけど、そこで二人共、マシュを見ていて！」
私はそう言うと、マシュが指した方向に進んでいく。
お目当は――――。
「マシュが指した場所を多分、このへんのはずよね…っと、あったわ。これよ、これ…！」
私のアイテムポーチだった。
――――アイテムポーチ。
普通それだけを聞けば、小物だけを入れるものをこの世界のみんなは思い浮かべるだ

ろう。
しかし、私の世界のものは、今日、読んだ漫画の中にあった、４次元ポケットに近いのだ。
実際、向こうでは普通に、そんなものが入るのだろうか…？というような、大樽爆弾や大食いマグロなどをしまっている。
前に、どうして、そんなに…？と思った拾われたばかりの、小さい頃の私は気になり、その作られる元を探し、見たのだが…。
まさかの竜人族がポーチなどの作成元だった。しかも、気のせいか、ポーチが作られているだろう所から、なんか呪文的なものが……と、脱線する前にだ。
とりあえず、今、必要なものは、二つ。この中から…。
「…あった」
「ノワール、それは？」
「ちょっとした飲み物よ。とりあえず、立花、立夏。二人とも、飲んで」
そう言って、私はクーラードリンクを二人に渡す。
クーラードリンク。
それは簡単に言えば、体を冷やし、火山などの暑さを軽減する飲み物である。
なお、生前、知り合いのハンター達がこのクーラードリンクの影が薄いせいか、うっ

かり所持するのを忘れることが多くあったな。と言う感じの記憶がある。
なぜなんだろう？必需品なのに…。これ、影が薄いのかしら…？
あと、どうでもいいけど、今、思ったけど、カルデアとカルデラって似てるわね…？
「…っと、二人共飲んだ？」
「あっ、うん！飲んだよ！」
「なんか、飲んだら、体が冷え始めて、暑さを感じなくなったけど、これは一体…？」
「それ？うっかりと忘れてしまう程、ただの影の薄い飲み物よ…っと、後はマシュに――――」
っと、その時だった。
「っ⁉？お兄ちゃん！あれ！」
「⁉？…嘘だろ…⁉？」
「あ…」
『観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる近未来観測データを書き換えます。近未来百年までの地球において、人類の痕跡は　発見　できません。人類の生存は　確認　できません。人類の未来は　保証　できません』
「カルデアスが……真っ赤に、なっちゃいました…。いえ、そんな、コト、より――――」
『中央隔壁　封鎖します。館内洗浄開始まで　あと　１８０秒です』

「…隔壁、閉まっちゃい、ました。…もう、外に、は」
「そうね。閉まっちゃったわね」
「…だけど、なんとかなる筈さ」
「だね」
「フォウフォーウ」
「……」
　私達の返答に、黙り込むマシュ。
　しかし、その沈黙の中には、確かな安心と落ち着きがあった。
『コフィン内マスターのバイタル　基準値に　達していません。レイシフト　定員に達していません。該当マスターを検索中・・・発見しました。適切番号４８　藤丸　立夏　適切番号４９　藤丸　立花　を　マスターとして　再設定　します。アンサモンプログラム　スタート。霊子変換を開始　します』
「……あの……せん、ぱい　たち。手を、握ってもらって、いいですか？」
「わかった」
「了解！」
「いいわよ」
　そう言ってマシュの手を握ると同時に、カウントダウンが始まった。

『レイシフト開始まで　あと　3』

――何が起こるかわからない。何があるかわからない。

『2』

――でも、それでも、今いる三人だけは。仲間として認めた人達は。

『1』

――なんとしても。なんとしてでも、絶対に守る。

『全工程　完了（クリア）。ファーストオーダー　実証を　開始　します』

私がそう覚悟すると、同時に、私達は光の中に包まれていった――――。

第十話／解き放たれし竜の力

「――――キュウ…キュウ。ホォーウ、ホォウホォーウ！（はぁ…早く起きやがれ！）」
「先輩方。起きてください。……起きません。ここは正式な敬称で呼びかけるべきでしょうか…？」
「うーん、必要…ないわね。私が起こすわ」
　そう言って、私は蹴りを入れる。
「痛え!?」「いたい!?」
「ちょっ、ノワールさん!?なんで、先輩方を蹴ったんですか!?」
「えっ？私がいた所は、これが普通の起こし方だったわよ？まぁ、中には、思いっきり殴ったりしてた奴もいるけど」
「え、本当ですか…？」
「フォウ…フォホォーウ……（Ｏｈ…Ｃｒａｚｙ……）」
「フォウくん、何か言ったかしら？」
「ホォウ？（いいや何も？）」
「そう、なら良いわ。…にしても、ここはどこなのかしら？」

そんなことを言いながら、周りを見渡す。
見た感じをまんまで言えば、燃えている、いわば火の世界とでも言えばいいのだろうか？
管制室よりかはましだが、まだ暑さがある。
ざっと４０℃くらいだろうか？
まぁ、それは置いといて。
「…まぁ、いいわね。とりあえずは、マスター二人が起きたことだし。私はこの周りにいる敵でも倒すとしましょうか」
そう言って、私は周りを見ると、そこには――――。
「ＧＩ――――ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」
正真正銘の、骸骨のモンスターがいた。
にしても、骸骨、ね。
骨と言われれば、あのモンスターを思い出すのだけど、まぁ、それは置いとくとしましょうか。
「――――言語による意識の疎通は不可能。――――敵性生物と見なしていいわね」
「そうですか…。なら、先輩方、指示を！わたしとノワールさん、先輩方の四人で、この事態を切り抜けます！」

「えっ!?でも、ノワールは…」
「安心して、立花。私は普通に戦えるから」
私はそう言うと身体を完全に竜化させた――――。
――――立花ｓｉｄｅ――――
「――――綺麗…」
最初に私の口から出た言葉はそれだった。
目の前にいるのは、黒く、妖しく、禍々しく、しかしながら、美しいドレスを着た一人の少女。
その美しさは、まさしく、暴力的であり、目を話すことが出来なかった。
「――――綺麗…か。ふふ、それは嬉しい言葉をもらっちゃったわね」
そう言いながら、にこりと笑う、ノワール。
私は思わず、その笑顔に顔が赤くなってしまった。
…うん、ひとつだけ言わせて。
何、この子。可愛い。
お持ち帰りしていいかな?
ねぇ、いいよね?
と、まぁ、それは置いといてだ。

「にしても、えっと、ノワーさんル…その服は、一体…？」
どうやら、お兄ちゃんも私と同じことを考えていたらしく、そう尋ねながら、服装を見る。
今、ノワールの服装を一言で表すならば、
《中世の姫君》
とでも言えばいいのかな？
そんな風な服装なんだけど、どこか、その服装に異質な感じを、違和感を、奇怪さを感じた。
まるで、ドレスであって、ドレスではないような感じがするのだ。
「ふふ、これ？ただの「ノワールさん！敵が来ます！」…マシュ、わかったわ。二人共、とりあえず、話は後でね」
そう言って、ノワールは、私達に微笑むと、マシュの方へと歩いていくのだった――――。

第十一話／竜姫の目覚め（リメイク）

「――――さてと、久々に行きますか」
誰に向けて言うまでもなく、私はそう呟く。
元々、こう言う対怪物戦闘は、絶対にあの狩人（ハンター）達がするものなのだが…。
しかし、今、ここにいるのは、私しかいない。
私とマシュしかいないのだ。
この怪物相手に戦えるのは。
ならば、私があの狩人（ハンター）達に変わって、怪物を狩るのみだ。
「…マシュ、宝具の出し方って、わかるかしら？」
「えっ!?あっ、えっと、イメージすることで、宝具をだすと聞いたことがありますが…」
「なるほどね…」
そう言って、私は目を瞑る。
思い起こすは、あの、紫色の、鎌のような、剣斧。
私の素材で作られたあの剣斧を、かなり細かく、鮮明に思い起こす。
なお、こうしている間に骸骨のモンスターが私に襲いかかってきているものの、私は

当然のごとく、避けている。
それは、骸骨から感じ取れる温度のおかげである。
どうやら、先ほどまで炎に熱せられていたせいか、妙に熱を持っているようだ。だから、そのおかげで、現在、目を閉じながらでも、私は避けることができているのだが。
――――これくらいでいいだろう。
――――あとは、ここに落ちて来るのを待つのみだ。
なぜかはわからないが、そう直感した。
自分の武器が落ちて来ると確信にも似た直感がした。
そして、気が付けば、上から何かが落ちてくるのが見えてきた。
「やっと来たか。私の身体の一部…」
事実でも、比喩でもある言葉をそう呟きながら、私は上に片手を伸ばし、落ちてくるそれをうまいこと受け取ると、そのまま、敵に向かって、すぐさま横に薙ぎ払う。
――――やっぱ、手に馴染むわね。
そんなことを思いながら、襲いかかってくる敵を薙ぎ払い、断ち切り、蹴散らしていく。
そうして、数分後、気が付けば、私達は、骸骨のモンスター達を全て倒していた。
「こんなものね…」

正直、もう少し、手応えがあってもいいのに。
そう思ってしまう自分は、いささか、戦闘狂だろうか？
まぁ、そうだとしたら、私のいた世界が異常なだけなんだろけど。
なんせ、下手をすれば、すぐに世界の終わりもありえるような世界なのだ。
その中で、異常な奴になるなと言われて、異常な奴にならい方が難しいくらいなのだ。
噂では、石ころだけでモンスターの部位破壊を達成した少年もいるらしいし。
閑話休題。
「マシュ、立夏、立花。怪我は無いかしら？」
そう言って、三人に念のため、怪我とかが無いかを聞く。
「あ、うん。ないけど…」
「はい、大丈夫です」
「俺は平気。ノワールは？」
どうやら、三人共、大丈夫だったようだ。
私はひとまず、安心すると、立夏に「大丈夫よ」と答える。
にしても。
「それはそうと、マシュ、あなた、元からあんなに強かったの？」
私がチラリと戦う様子を見た限りでは、下位のクエスト位ならなんとかあのモンス

ター達に通用する位の強さ。
　しかし、出会った時には、そうとも感じられなかったのだけど…。
　そんな私の疑問を答えるかのように、マシュは首を横に振る。
「…いえ、戦闘訓練ではいつも居残りでした。逆上がりも出来ない研究員。それがわたしです」
「そう…」
　となると、マシュのあの強さは、後天的、それも、レイシフト後についたものの可能性が高い。
　そんな風に色々と考えていると――――。
『ああ、やっと繋がった！もしもし、こちら、カルデア管制室だ、聞こえるかい!?』
　そんな声と共に、慌てた様子のロマニさんの姿が浮かび上がった。
　にしても、ロマニさん、無事だったのね。よかった…。
　そんな安堵をすると同時に、マシュが話を始める。
「こちらAチームメンバー、マシュ・キリエライトです。現在、特異点fにシフト完了しました。同伴者は、藤丸立夏、藤丸立花、ノワール・ゴア・マガラの三名です」
「ん…？」「えっ…？」
「二人共、どうかしたの？」

「え…あ、いや、ちょっと、今、私の耳にとある竜の名前が聞こえたんだけど、気のせいだよね!!」
「まさか、英霊になっている、ましてや、人の姿になっているはずないしな!!」
「ははははは!!」
「えっと…うん、そっとしといた方が良さそうね…」
「ですね…。少し、そっとしときましょう…」
そう言って頷き合う私たち。
…そこには、ほぼ発狂に近いテンションの二人のマスター(藤丸兄妹)を、完全に白い目で見るサーヴァント(マシュ)達(私と)の姿があった。
「話を戻します…。レイシフト適応、マスター適応、ともに良好。藤丸立夏、藤丸立花の二人を正式な調査員として、登録してください」
『…やっぱり、藤丸兄妹、ノワールくんの三人もレイシフトに巻き込まれたか……。コフィンなしでよくの意味消失(いみしょうしつ)に耐えてくれた。それは素直に嬉しい。それと、ノワール、マシュ…君達が無事なのも嬉しいんだけど、その格好はどういうコトなんだい!?特にマシュ!君の服装はハレンチ過ぎる!僕はそんな子に育てた覚えないぞ!?』
「……なぜかしら。後で、ロマニさんが秘匿しているであろう、マル秘ファイルを見つけ出して、壊したいのだけれど。なぜなのかしらね…?」

「ノ、ノワールさん、お、落ち着いて！それと、ドクターも、変なことを言わないでください！」

『そんなことを言われても、手塩に手塩をかけて育て『ロマニは黙って欲しい！』あべしっ!?……』

「…えっと」

……今、ダウィンチさんがロマニさんを殴った時に《ボゴン》と言う鳴ってはいけない、いやむしろ、鳴らそうとしても鳴らない音が出たのだけど。

気の所為、よね…？

と言うよりは、気の所為、であって欲しいわね…。

『すまないね、うちのロマニ（ロマニ）が暴走してしまったせいで迷惑をかけた。見苦しいところを見せてしまったね。あとでこのバカをきっちりお仕置きと説教をしとくから…』

そう言うダウィンチさんの背後に何故か、修羅や鬼、果てにはあの祖龍を見た気がした。

『…それで、話を戻すけど、マシュ、ノワール、君たちのその姿は一体どうしたんだい？』

「…これは変身したのです。カルデアの制服では先輩達を守れなかったので」

『変身…？変身って、なに言っているんだマシュ？頭でも打ったのか？それともやっぱり、さっきので……』

『ちょっと待て!?ロマニ、君は、さっき私が完全にノックアウトした筈なのだが何故!?』
『…ふふふ、僕は何度でも蘇る!そう!何度で「――――ロマニさん、いい加減にしなさい。さもないと、ロマニさん、貴方を…天国に連れてくから」ッ!…ふ、ふふざけてすみませんでしたあぁぁ!!』
私の良心(殺意)のこもった優しい言葉(怒りの脅迫)に対して、ロマニさんは土下座をすぐさまにする。
うん、それでよろしい。
「それで話を戻しますけど、わたしの状態をチェックしてください。それで状況は理解していただけると思います」
『君の身体状況を?』
そういって、訝しながらロマニさんが手元で何かを操作すると…。
『お…おお、おおおおぉぉ!?身体能力、魔力回路、全てが向上している!これじゃ、人間というより――――』
「はい、サーヴァントそのものです。経緯は覚えていませんが、わたしはサーヴァントと融合した事で一命を取り留めたようです。今回、特異点Fの調査・解決のため、カルデアでは事前にサーヴァントが用意されていました。そのサーヴァントも先ほどの爆破でマスターを失い、消滅する運命にあった。ですがその直前、彼はわたしに契約をもちかけてきました。『英霊としての能力と宝具を譲り渡す代わりに、この特異点の原因を

排除してほしい』と」

『…英霊と人間の融合……デミ・サーヴァント。カルデア六つ目の実験だね。そうか、ようやく成功したんだね。それで、マシュ、君の中に英霊の意識はあるのかな？』

そう言って、考えるようにしながら聞くダヴィンチさんに対し、少し暗い顔でマシュは答える。

「……いえ、彼はわたしに戦闘能力を託して消滅しました。最後まで真名を告げずに…。ですので、わたしは自分がどの英霊なのか、自分が手にしたこの武器がどのような宝具なのか、現時点ではまるでわかりません」

『……そうなのか。だがまあ、不幸中の幸いだな。召喚したサーヴァントが協力的とは限らないからね。けど、マシュがサーヴァントになったのなら話は早い。むしろ、全面的に信頼できる。それよりもだ…』

ロマニさんはそう言うと私の方を見て、頭を抱えながら言い始めた。

『ノワール、君のその姿、その武器は一体…？』

ロマニさんが疑問に思うのは仕方のないことだろう。

なんせこの武器、この姿は――――。

「――――きゃあああああぁぁぁ!?」

「今の声は!?」
「どう聞いても女性の声です！急ぎましょう、立夏先輩、立花先輩、ノワールさん！」
「うん、わかってる！」
「っ！ロマニさん、すまないけど、またで話すわ！」
『あ、ああ！わかった！こちらももう通信がそろそろ切れそうだ！また後で――――――！』
「えぇ！また後で！三人とも行くわよ！」
「あぁ！」「うん！」「はいっ！」
そう三人が返事すると、そのまま、私達は悲鳴のあった元へと向かって行った――――。

第十二話／燃える町（前編）

――――いた！

私はその女性の姿を見るとともに、その女性に遅い掛かろうとする怪物達を思いっきり、ぶっ飛ばす。

「――――なんで…なんで、あなたが、あなた達がここに……!?」

驚きを隠せない女性。

けれど、今は戦闘中だ。

悪いけれど…。

「オルガマリーさん、ごめんなさい。詳しい話は後。今はとりあえず…」

「ＧＩ――――ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」

「こいつらを倒すのが先だから…！」

そういうと、私はウィルｏｆソウルを構え直した――――。

＊＊＊＊Ｎｏｗ　ｌｏａｄｉｎｇ＊＊＊＊

「――――ふぅ…こんなものか…」
「ですね」
私はそう言うと、後から来たマシュと共に戦闘態勢を解いた。
「…にしても、ノワールさん。先に行かないでください…。何かあったら、どうするんですか…？」
「大丈夫よ、その何かは起こらないし、何かがあっても、その何かをぶっ潰すから」
「いや、ですから――――」
「だから大丈夫よ。原因が敵なら、その元凶をぶっ潰すだけだし、それにその元凶に物理攻撃さえできれば、切っては投げをして、なんとかするから…！」
――――この時、そう言って軽くドヤ顔をしてた私だが、後々、全員、それに対して、
（（（戦闘狂（です）か…））） …あと、うん、ノワールかわいい）
と思ったことを知り、色んな意味で顔を真っ赤にすることとなった。

「…それで、話を戻しますけど、戦闘、終了しました。所長、お怪我はありませんか？」
「…はあ、色々ありすぎた上に、さっきの話で何箇所か突っ込みたいところがあったけど……」
そう言ってから、もう一度ため息を吐くと、真面目な顔になるオルガマリーさん。

「……どういうこと？」
「所長？…ああ、わたしの状況ですね。信じがたいことだと思いますが、実は――――」
「サーヴァントとの融合、デミサーヴァントでしょ。そんなの、見れば分かるわよ。私が聞きたいのは、どうして今になって成功した話よ。いえ、それ以上に藤丸兄妹、貴方達。なんでマスターになっているのよ？サーヴァントと契約できるのは一流の魔術師だけ。１００歩譲って、まだ立夏の方は、頑張って魔術師になろうとかなり努力していたのを知っているからまだわかるけど、立花、あなた、勉強とか色々、ほっぽからしてグダグダしてたのになんで契約できているのよ」
　そう言われて、「うっ…」と肩を竦める立花。
　…はぁ…立花を援護しようにも、その言葉を言い返そうにも、言ってる事が正論である上に、立花のしてた行動が行動の為に言い返せないわね。
　それはどうやら、マシュも同じらしいのか、溜め息をついているし。
「まさかとは思うけど、二人に乱暴とかは…って、ありえなかったわね。立夏がいるのに、そんな事できるはずがないもの」
「ちょっと待った！なんで、お兄ちゃんがいたら、私がそんな事をしないってことになるんですか、所長!?」
「だって、立夏がいれば大丈夫だと思っているもの」

「大丈夫だもの、って…!?」
「じゃあ、聞くけど、立花、貴女に聞くけど、自分に信用あると思っているの…? 少なくとも、私からすれば、ある意味、信用がほとんどないと思っているのだけれど…」
▽オルガマリーの信用がないという冷たい目!
▽立花に当たった!!
▽クリティカルだ!
▽立花は涙を流しながら、うな垂れた……。
「うっ……」
「立花先輩…どうして、自分に信用があると思ったんですか……」
「まぁ、妹よ。自業自得だな」
「うっうっ……!」
「それにそもそも、立花先輩、課題とかの、所長に言われたことやってないじゃないですか。なのに、信用があると思う方が難しいと思うのですが…」
「確かにな。この前だって授業に遅れた上に、授業中寝てたしな…」
…うん、立花、言われたい放題ですね。わかります。
あと、二人共、言わないであげて…。
立花のHPはもうゼロなのに、それ言われたら……。

「」＜チーン

あっ、やっぱり…気絶しちゃったわね…。

というか、今、どこからか、音が聞こえた気がしたのだけど…気のせいかしら。

「…それで、とりあえず、どうしてこうなったか、経緯の説明を話し会いましょう」

「わかりました。それじゃあ私達から――――」

そういうと、お互いにこれまでの経緯を説明し始めた――――。

第十三話／燃える町（後編）

「――――以上です。わたしたちはレイシフトに巻き込まれ、ここ冬木に転移してしまいました。他に転移したマスター適性者はいません。所長がこちらで合流できた唯一の人間です」

「そう・・・・」

そう頷くと、オルガマリー所長は目を閉じると考えこみはじめる。

「・・・でも、所長が無事でよかったです。これで希望ができました。所長がいらっしゃるのなら、他に転移が成功している適性者も・・・・」

「……いないわよ。それはここまでで確認しているわ」

静かに、はっきりとそう告げるオルガマリー所長。その目にはどこか悲しそうな目をしていた。

「・・・認めたくはないけど、どうしてわたしとあなたたちが冬木にシフトしたのかわかったわ」

「生き残った理由に説明がつくのですか？」

「消去法…いえ、共通項ね。わたしやマシュ、立花や立夏、ノワールも、全員コフィンに

入っていなかった。生身のままのレイシフトは成功率は激減するけど、ゼロにはならない。一方、コフィンにはブレーカーがあるの。シフトの成功率が９５％を下回ると電源が落ちるのよ。だから彼等はレイシフトそのものを行なっていない。ここにいるのはわたしたちだけよ」

「なるほど……さすがです、所長」

「…はぁ、こうして落ち着けば、頼りになるんだけどなぁ……」

「…ほんとにね。所長、わたわたパニクると、ドジとかをよくふむからね……」

「…そこの二人。何か言ったかしら？」

「いいや（いいえ）、何も？」

「…はぁ……まぁ、いいでしょう。状況は理解しました。それで…ノワール。少し聞きたいんだけれど、あなたの契約状態ってどうなってるのかしら？一応、状況としては、立夏がマスターなわけだけど…」

壁に寄りかからながら、そう言うオルガマリー所長。

えっと…これは、なんて言っていいのだろうか…？

おそらく、契約とは違う…むしろ、あれに近い感覚なのだけれど…。

でも、ちょっとあれとは少し違う気もするのよね…。

とりあえず、説明…しなきゃね。

「えっと、なんていえばいいのかしら…。わかりやすく言うと、私はいま、誰とも契約していない状態なのよ」
「えっ!?どう言う事ですか!?」
「…あぁ、そういうことね。…ノワールは半英霊(デミサーヴァント)でも、英霊そのものでもない、本当に幽霊に近い虚ろな存在。だから、立夏と契約できていない。仮に契約できていたとしても仮契約止まりなんじゃないかしら?…それから、あと、これはあくまで私の推測なのだけれど……ノワール、多分、貴女は英霊の座についていないわ」
「「えっ…」」
「ちょっと、待ってください!それはっ…!」
オルガマリー所長の言葉に驚く立夏達。
しかし、不思議と、自然と、私はその言葉に納得していた。
「…ノワール。貴女、その様子だと、理由にでも思い当たることでもあるのかしら?」
「ええ…私の元が元だから…なんとなくはね…?」
おそらく、私がこうなった原因は――――。
「…まぁ、多分、彼女よね……」
もともと、私は英雄でもなんでもない存在。
なのにこうしてここにいる。しかも人の姿で。

そんなことができるのは、最も神に近いあの龍達だけであり、その中で私達と繋がりがあるとすれば…。

「…まぁ、とりあえず、これからどうするか話しましょうか？」

そう言うと、私はとりあえず頭の中から彼女の存在を消し、これからどうするかを考え始めた――――――。

第十四話／霊脈地へ①

「――――まずは拠点となるベースキャンプを設置する…ってことでいいかしら？」
「はい、それで大丈夫です!!」
「異議なーし!!」
「はい、それでいきましょう」
「右に同じく」
あれから色々話し合い、最終的に取り敢えず、戦力を増やしてから聖杯を取りに行くって言う話になった。
にしても…。
「それにしてもさぁ、お兄ちゃん。なんか、久しぶりに会った気がするね。具体的に言うと、一年ぶりくらいかな？」
「だな……。ずっといたのに、なんか長いことあってなかった気がするよな」
そこの二人。メタいことを言ったらダメよ。
確かに、作者が途中エタったのが悪いし、気持ちはわかるけれども。
言ったらダメだからね？

――――閑話休題（それはともかくとして）――――

「それで…これからどうするの？…別にベースキャンプ設置するのはいいわ。けれども、場所を考えないと……襲われるわよ？」

そう言って、私はかつての記憶を呼び起こす。

――――昔、あの二人がギルドマスターから緊急で受け、それで私も一緒に付いて行った、誰一人として行ったことない、とある未開の地での調査探索クエスト。

――――当然、ハンターも行ったことがないという未開の地。そこにはハンター達が常時設置しているようなキャンプ地はおろか、人が来た気配すらも無かったので、適当なところでキャンプを作り、拠点としたのだが…。

――――しかし、それがいけなかった。

――――その数時間後、その場所に《魔獣》が現れ、戦い、逃げる羽目になったのだ。

――――幸いにも、あの娘が自作した睡眠樽爆弾を持っていた為、それを使って《魔獣》を眠らして逃げれたけれど……。

――――もし、あれで睡眠樽爆弾を持っていなかったら…と思うと、ゾッとする。

――――だからこそ、私はテントなり、拠点を作る場所は慎重になるのだが…。

「…ええ、それはわかっているわ。だから、今、前に仕事で来た時、たまたま見つけた、龍脈から最も濃くマナを発して、しかも、立地的にも、敵対者から迎撃も出来る上に、隠

れられそうな場所に向かっているのよ」

「…えっと、所長。それって一体どこ…なんですか……？」

そう言って、不安がる立花に対して、所長はニヤリと笑うと、とある方向を指して言った。

「冬木市の管理者（セカンドオーナー）にして、この場所で起こった聖杯戦争における御三家の一つ。時計塔にて首席候補にして、赤い悪魔の異名を持つ、遠坂　凛の生家。遠坂亭よ――――！」